



オーストラリアの医療点描

すぎもと よしお
杉本 良夫

●ラトローブ大学名誉教授・社会学

アジア系のお医者さんが増えている。メルボルンに半世紀近く住んで、病院や診療所に出かけるたびに、そのことに目を惹かれる。

私たちがかかりつけの一般医は、ベトナム系のN先生である。ベトナム難民の家庭に生まれ、猛勉強して医学部に入学し、医師となった。十数人のドクターがいる診療所の一員で、もうここ10年以上、お世話になっている。大きな声で熱心に対処してくれるので、ありがたい。

お医者さんには、オーストラリアでも一般医と専門医の区別がある。一般医の方はジェネラル・プラクティショナー、縮めてGPと呼ばれ、具合が悪くなると、まずそこで診察してもらうのだが、より本格的な診断が必要となると、紹介状を書いてもらって専門医に見てもらう。こうしたスペシャリストの中に、アジア系移民二世の進出が目立つ。直接お世話になったわけではないが、知っている専門医だけでも、中国系の脳外科医、マレーシア系のガン専門医、インド系の血管病専門医など、枚挙にいとまがない。

オーストラリアは1970年代から、多民族社会の形成に進路を切った。マルチカルチュラル・ソサエティーを国是として、世界各地から移民を受け入れてきたのだが、以来40年ほど経って、その効果がじわりと現れてきた感がある。事実、ベトナム難民だけで20万人以上が、この地に定住した。いまでも毎年20万人の永住移民を世界各地から受

け入れている。一日500人を超える勘定だ。その初代は言語の障壁などがあって、なかなか階級上昇はむずかしい。しかし、その子供世代のトップクラスは、医学の世界でも不可欠な存在となっている。

もともと、こちらで日本人の家庭で育ち、オーストラリアの大学を出ながら、その後オーストラリアに根付いて専門医として活躍している人物には、これまでお目にかかったことがない。いたとしても、その数は少ないだろう。日本人でオーストラリアに永住している人たちの多くは、歳を取ると日本へ戻る。国籍も変えない。この地で骨を埋める気概で定着している他のアジア系の人たちとは、この点が違う。子供たちの多くもオーストラリアで育ちながら、日本へ帰る気分を捨てきれない。

大学の医学部は、男女学生がほぼ半々。一般医のレベルだと、この比率はあまり変わらないが、専門医となると女性の割合が低くなる。この段階でのアジア系男性の進出ぶり比べると、女性がスペシャリストの医者として活躍するには、まだ「ガラスの天井」が厚いのかもかもしれない。この世界では、民族の壁よりもジェンダーの壁の方が高いのだろうか。

一方、医療サービスを受ける患者の側も、アジア系の人たちが増えている。去年の統計だと、オーストラリアで生活している人びとのうち、海外



生まれの大半はアジア出身で、ヨーロッパ出身ではない。そういう人たちの中には、オーストラリアの医療システムに戸惑ったりしている人たちも数多い。

細かいことだが、待合室で診察の順番が来ると、呼び出しに来るのは医師本人で、看護師や事務員ではない。「ヨシオ。プリーズ」と自分で診察室へ招き入れてくれる。医者に対して、平等感や親近感を感じる瞬間だ。

それに、公立病院での治療は無料である。診断や手術でも出産でも全く費用がかからない。国民全員がメディケアというシステムに参加することが義務づけられており、収入の2%が差し引かれる。各家庭にはメディケア・カードというカードが配られている。薄緑でクレジット・カードほどの大きさだ。この制度の対象は国籍と永住権を持つ人たちだけに限られていて、旅行者などには適用されない。政府も巨額の予算措置をしてこの制度を支えているにしても、全く無料というのには、当初はびっくりさせられる。

しかし、公立病院はタダだから、当然そちらに行きたい人が多いため、手術などは長い間順番待ちをしている人が多い。それは絶対困るといふ人たちは、すぐに入院できる私立病院へ入れるように、民間の医療保険をかけている。私の知り合いの中には、保険料を渋って、歯痛を半年以上我慢していた人がいるのには驚いた。

それに、入院患者を取り扱う原則として「治療は病院で、回復は家庭で」という考え方が徹底している。治療が終わるとなるべく早く家庭に戻す。病院滞在期間が、極めて短い。病院のベッドを多くの人に使えるという利点もあるが、何といても自宅で療養という基本方針はありがたい。家に帰っても、何度も看護師が訪ねてきて、異常がないかを確認していくことが多い。回復のための詳しいアドバイスなども残していく。

漢方も進出してきている。私がときどき訪問しているのは、中国本土からやって来たW先生だ。都心の中華街の近くに診療所がある。本場で勉強してきただけあって、腕は確かだが、英語はややおぼつかない。しかし、重要なのは語学力ではなく、病気を治せるかどうかだ。いわゆる白人の人たちもやってきている。最近は医療保険も効くようになった。

イギリスの雑誌『エコノミスト』が毎年行っている「世界で最も住みやすい町」のランキングで、メルボルンはここ7年ずっと首位である。その理由のひとつは、医療システムの充実にあるのだそう。そんな実績の背景には、医療の世界での慣例の継続と多民族化の進行が相互交錯しているように思える。